北米の大学図書館におけるWeb2.0以後の変化

情報リテラシーに与えた影響

Changes in academic libraries in North America since Web2.0

Impact on information literacy

野口 契子¹

NOGUCHI Setsuko¹

.....

¹ イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 アジア図書館

¹ Asian Library, University of Illinois at Urbana-Champaign (325 Main Library, 1408 West Gregory Drive, Urbana, Illinois 61801)

E-mail : enoguchi@illinois.edu

原稿受理 (2008-11-26)

(情報管理 51(10):733-742)

1. Web2.0の定義と情報リテラシー

Web2.0という言葉が巷の話題にのぼるようになって数年経つ。Web2.0の概念については、あいまいでわかりにくいと言われているが、一般的にティム・オライリーが2005年に「Web2.0」を提唱した概念が最も頻繁に引用されている¹⁾。これはWebの世界に新しく見られるWebサイトやそのサービスの变化を特徴付けてとらえたもので、斬新であるとともに巨大、かつ流動的なWebの变化の実態をよくとらえている。

このWeb2.0とそれに関連する技術の影響力は企業、学術などあらゆる面にわたっているが、筆者が勤務する米国の大学図書館の世界においても、わずか1・2年の間にいろいろな面でWeb2.0によりもたらされた変化が見られ、今や主流とまで言われる。また、米国において見られる変化の方が、日本における変化より大きいように見受けられる。これは筆者の私見であるが、米国よりはるかに狭

い国土で情報の行きわたる速度が速く、しかも技術面で米国より先を行く日本におけるテクノロジーの衰勢の速さと、アイディアや新しい技術が生まれてもそれが社会全般に浸透していく速度の遅い米国においての現象の違いではないだろうか。技術の伝播が遅い分、それが行きわたるまでの間に多民族や各層における文化を取り入れつつ、大きくまた柔軟に形成していくのが米国での現象と思われる。ここでは、米国における図書館の事例を中心として、Web2.0のもたらす環境のもとで新しいリソースや情報の形から得られる膨大な情報量をいかに取り入れリサーチに反映させていくか、また、利用者に情報を得る上での注意をどのように喚起するかという情報リテラシー面に着眼したい。

まず、オライリーが定義したWeb2.0の特徴とは、1. The Web as platform, 2. Harnessing collective intelligence, 3. Data is the next Intel Inside, 4. End of the

software release cycle, 5. Lightweight programming models, 6. Software above the level of a single device, 7. Rich user experienceの7点であるが、実はこのどれもが情報リテラシーの観点からみれば諸刃の剣となると筆者は考える。

1. The Web as platform (プラットフォームとしてのWeb)

パソコンのデスクトップ上で行われていた検索や研究・創作活動などの作業がWeb上で行われることにより、プロジェクトへの参加が容易になり参加する人数が増える。提供される情報の速度も速い。しかし、プロジェクトの管理がしっかりしたものでなければ、確実に情報が保存されるという保証はない。Webサイトが移動、消滅する可能性もある。

2. Harnessing collective intelligence (集合知の利用)

Web2.0の代表的な特徴の一つが「集合知」である。この集合知は、従来の権威あるタクソノミーによる体系的な分類法による情報の管理ではなく、人々が提供しあう知識により関連付けられる、フォークソノミーと呼ばれる分類体系で管理されることが多い。従って、広範囲にわたる語彙が集積したデータベース等のリソースの提供が可能である。その一方で、内容に対する信頼性への疑問も存在することは言うまでもない。

3. Data is the next Intel Inside (データは次世代の“インテル・インサイド”)

Webの核となるものはデータであり、独自性があり優れたデータを所有し、かつ有効に提供することが重要である。しかも、データは頻繁に変化する可能性が高い。所有するデータの持つ特性とその将来性を考えてどのように管理・運営するかによって価値も変わってくる。情報を高い精度で、プライバシーや著作権に至るまで念頭において管理するというのは実はかなり難しい。

4. End of the software release cycle (ソフトウェア・リリースサイクルの終焉)

今までのように難解なプログラミングではなく、簡単なプログラミングが可能になりソフトウェア面でも作業面でも低コストで情報を提供できるようになった。更新も速くなり、利用者は常に新しい情報を得ることが可能である。一方で、手軽なソフトウェアの変更により、提供される情報内容や形式の変化もあり得る。情報を発信する側は何かより求められるサービスなのかを判断していかなければならない。そのためには、利用者とのコミュニケーションや提供する情報の宣伝も必要になってくる。

5. Lightweight programming models (軽量なプログラミングモデル) および

6. Software above the level of a single device (単一デバイスの枠を超えたソフトウェア)

Web2.0の技術によりパソコンだけではなく、携帯電話や、BlackBerry, iPodも端末として情報を入力、発信できるようになった。これらの手軽で軽量、持ち運びのできる媒体により、情報はパソコンのある部屋の中だけでなく、利用者と行動をともにするようになった。日本においては携帯電話の技術が米国より早期に発展したため、特に新しい変化とはとらえられていないが、米国においてはこの現象は、従来コンピュータの利用に習熟していた層以外のさまざまな利用者からも、より広範囲な情報が求められるようになり、それに呼応して多様な情報が提供されるという飛躍的な変化を引き起こしている。利用者から求められる情報の精度、更新速度への期待も高くなっていくので、不必要な情報を避け、何が求められているかを常に念頭において運営をしなければならない。また利用者側から見ると、技術の発達によりもたらされた手軽さが、ともすれば情報源などの認識を希薄にさせる危険がある。

7. Rich user experience (リッチなユーザー経験)

これは、JavaScriptやAjaxなどのアプリケーションを実装することが簡単になり、それによって利用者のアクセシビリティも向上するというものである。例えば、GoogleではWeb上で運営できるカレンダーをはじめとするグループ作業ツールを提供しているが、どこからでもアクセスできる操作の容易なサービスは、ビジネスや学校関係でも利用者が多い。一方でセキュリティの問題が重要視されている。最近のGoogle Mapsにおける個人情報の流出がその例である。

このように、Web2.0の特徴として、サービスする側は比較的低コストでデータを提供することができ、ユーザー側は手軽に利用、また膨大な情報量、あるいは専門的なデータの入手が可能であると同時に、今までにも増して、情報をいかに速やかに正しく判断し、利用するかといったリテラシーの実践が必要になってくる。

2. ソーシャル・ネットワーク

以上挙げてきた中で、情報リテラシーの面から見たWeb2.0環境での最も顕著な動向は、ソーシャル・ネットワークの発達に尽きると言っても過言ではない。Nielsenの統計によると、2006年にはMySpaceをはじめとする米国トップ10のソーシャル・ネットワークのサイトにアクセスした利用者の数は6,880万人に上り、これは前年に比べて47%増とされる²⁾。この飛躍的な数字の増加は、必要な情報に即アクセスできない広大なアメリカの地方都市に住む人々にとって、ソーシャル・ネットワークを通じての何らかのコミュニティーへの参加が魅力的であり、かつ情報収集が容易になったことを示していると筆者は見る。

ソーシャル・ネットワークには、不特定多数の

人々によるものと、ある特定の分野の人々によって作成される特化型のものがある。前者において、Web情報の主導権が管理者／発信者から参加するユーザーに移り変わりつつあることは、すでに指摘されている。ティム・オライリーが挙げているWeb2.0の7つの特徴のひとつである「集合知の利用」はソーシャル・ネットワークによって集められた集合知を指す。例としては、AmazonやLibraryThingが挙げられる。図書館はどちらかといえば後者の特化型に属するが、図書館という性格から、収集した資料・情報を、利用者とコミュニケーションをとりつつ提供していくスキルは他に勝るものがある。blogやRSSを発信する図書館のホームページは米国では、もはや一般的に見られるものである。

ソーシャル・ネットワークにより、情報量は驚異的に飛躍し多様化した。また、^{あふ}溢れ出てきた情報はまたたく間に伝播し、浸透していく。最近では情報を発信する側も利用する側も、情報に対する意識が次第に洗練されつつあり、よりよいデータを集積しようとする傾向がある。その反面、意図的にしる無意識にしる、操作された情報が横行する危険性を常にはらんでおり、むしろソーシャル・ネットワークの特性を悪用されることもある。

2.1 ソーシャル・ネットワークの利点

ソーシャル・ネットワークの利点をまとめてみると、収集された情報は今までにない巨大な情報源を作り上げ、広範囲の利用者に提供できるようになるということに尽きる。時差や言語の壁による多少の障害はあるにしても、情報提供源の垣根がなくなり、多種多様なリソースが短時間でまとまる。また、先に述べた特定の利用者による特化されたwikiなどの作成により、学術的なコミュニティーによる高度な集合知が形成される。企業や

研究所はWeb2.0を利用し、R&Dの向上を図ることもできる。

2.2 ソーシャル・ネットワークの問題点

言うまでもないことだが、Web上で提供される情報は修正・複製が可能である。簡単に入手、改ざんできる情報を剽窃^{ひょうせつ}する事例は多い。これは、ソーシャル・ネットワークの中で提供される情報に対し、手軽感から感覚が鈍るからではないかと思われる。利用者が意図せずして同じアイデア、言葉を使用する可能性も大であるが、見極めはきわめて難しいと言える。従って著作権問題はより複雑になるであろう。

また、目に見える部分と見えない部分を認識するのが困難であるという盲点が挙げられる。例えば、情報を検索する際に使用する自分の知識内の語彙による検索結果は、すべてを網羅したもの、あるいは精度の高いものではない可能性がある。要するに自分の語彙では検索結果に現れない情報も多いのだ。しかし、われわれはともすれば検索結果を追うことにとらわれ、結果に現れない部分についての存在の可能性を忘れがちになる。フォークソノミーについても同じことが言える。多数の人々が使用する言葉であるからといって、すべてが正しい語彙であり、すべての人に使われるというわけではない。

最後に虚と実の部分の可能性が挙げられる。blogやMySpaceなどは、著作者／発信者が自由に著作／発信する権利を持っているが、同時に虚飾の世界を展開できる場でもある。また直接的、婉曲的な誹謗や中傷の場にもなり得るし、扇動的な言動の場にもなる。筆者はWebで入手した全く根拠のない情報を信じ、他の人々にそれを発信する人々を学生のみならず社会人の間にも多く見かけている。

3. Library2.0

それでは、図書館においてWeb2.0はどのような影響を与えているか。一般的には、Web2.0の技術を利用して利用者重視のサービス向上を図る図書館もしくはそのサービスを「Library2.0」と呼んでいるが、Web2.0と同様にLibrary2.0についても定義は明確でない。特に図書館離れが進む利用者の確保を目的として開発される面もあり、また、経済状態の悪化による慢性的な人手不足の解消にも役立っている。blogによる図書館のニュース発信、インスタント・メッセージを使ったヴァーチャル・レファレンスや、iPodを使用した図書館のヴァーチャル・ツアーなどのサービスは、米国の大学図書館ではもう目新しいものではなくなってきている。これらについては日本でもいくつか例が見られるので、ここでは新しい事例として、次世代OPAC、Second Life、Web典拠ツールの3点を報告し、情報リテラシーの面から検証したい。

3.1 次世代OPAC

Library2.0の例として、米国で現在最も注目されているのは次世代OPAC³⁾であろう。書籍等のカバーの写真、自館を含めた地域図書館の所蔵の有無、著者や主題による関連するレコードのリスト、タグの利用、網羅的な検索、OPACから得られる情報のカスタマイズなどが次世代OPACの特徴とされる。当初はソーシャル・ネットワークが大きな特徴とされ、利用者によるタグ付けが話題になったが、最近では疑問視する向きもある。口火を切った始めた図書館で思ったほどの利用がなかったことから、多くの参加者が望めないのではないかといいた声である。タグが多く付けられるのは、アニメやコミック、日本のカルチャーばかりというコメントも目にする⁴⁾。実際に、イリノイ大学の日

本語のコレクションを考えた場合、言語の問題や利用者の数から判断すると多くのタグは望めない。また、根本的に次世代カタログの基本となる図書館のOPAC自体がどこまで精度が高いかという問題もある。しかし、次世代OPACがAmazonの提供するような利用者中心のサービスを提供するOPACへと変化していくのは間違いない。

3.2 Second Life

次に、日本の図書館ではまだあまり見られない例としてSecond Lifeがある。Second Lifeとは最近日本語版も出た3Dオンライン仮想空間でアバターが学校やビジネスの場で仮想の生活をしているものだが、アメリカ図書館協会（ALA）はALA Islandというヴァーチャル・コミュニティをSecond Lifeに発足、ALA Island Story Hour Garden⁵⁾という名称で、本の紹介やイベントの場を開始している。仮想世界でのゲームとストーリーテリングを組み合わせた試みや、話題作の著者のALA Island訪問、選書の自由を語る禁書週間などなかなか充実した内容になっており、ALAはこれからもこのヴァーチャル・コミュニティを発展させていくだろう。筆者の勤務するイリノイ大学図書館でも、実際のライブラリアンがアバターとなりSecond Lifeの中でレファレンスサービスを行っている。また同校のライブラリースクールでは、Second Lifeにおいてどのように図書館や博物館を管理運営するか、Second Life内でのクラスにおける教授法といった講義を提供している。一方で、Second Lifeにおいて活動しているアバターたちが仮想の人間であること、仮想世界においても通貨が存在しビジネスが行われていることを私たちは忘れてはならない。損得の生じる世界において虚偽の風説や犯罪が発生することは十分あり得るからである。

3.3 Web上の典拠ツール

Web上で引用文献や参考文献等の典拠を作成、管理する新しいツールとして、RefWorks、EndNote Web、Zoteroなどが使用されている。米国の大学では、図書館のサイトを通じて提供されることが多く、活用方法についてのワークショップも実施される。これらのツールは、Webの特性を活かして手軽にアクセスし、必要な典拠情報をデータベースからインポートし管理できるという特徴を持つ。また、パスワードによるメンバーのアクセスが可能であり、情報交換や共通のデータベース構築の場ともなる。しかし、書誌的な情報の典拠記述は信頼できるものかという根本的な問題が残る。図書館のデータベースからインポートした書籍や論文記事の記述に誤りがある可能性もある。また、論文の中で引用されている情報がすべて正しいという保証はない。論文の中で引用した情報は、必ず一次資料にあたって確認するという契約を著者と出版社の間に交わすべきだという考えも出てきている⁶⁾。

上記で述べた次世代OPAC、Second Life、典拠ツールはいずれも利用者の参加を想定しているが、同時に監督責任者やコーディネーターの関与も大なり小なり必要とする。精度の高い結果を求めるのであれば教育の一環としてリテラシーも要求される。これは正確性を保ち高度な情報を提供するという図書館の性格からくるものである。また、専門的な知識や言語の知識が要求されるものについては、特にサブジェクト・ライブラリアンの役割が重要になる。

4. 学術コミュニケーション

4.1 Web2.0と学術コミュニケーション

デジタル化したデータのリポジトリの構築とオープン・アクセスの必要性は以前より討議されているトピックである。最近、Web2.0の特性を学術コミュニケーションの場に取り入れて、さらに情報の拡大・発展を図ろうという動きがある。ARL (American Research Libraries) は学術コミュニケーションに関する米国の大学のWebサイトとblogの一覧を発表し、現在見られる形式について報告している⁷⁾。このレポートは教育機関がどのようにこういったWebを利用しているか、教授たちがどのように電子出版を利用しているかなどをリサーチしたもので、米国の大学図書館においてWebにおける学術コミュニケーションが今や必須であることを示している。また、研究機関の傘下にあって発信されるWebサイトやblogが大量に存在するなか、各サイトにおいて提供される関連するリンク情報以外に、これらの分散する情報を主題ごとにまとめ系統立てて提供するのも利用者の立場に立つ一つのコミュニケーションの方法ではないか。これにはやはり、サブジェクト・ライブラリアンの能力に期待したい。

4.2 学術出版

米国における高等教育の場では、査読制のある学術出版における発表が強く求められるが、出版までに時間がかかる、発表の場に限りがあるといった問題がある。そこで、短時間で多量に発信できる、読者の参加の場がある⁸⁾などのWeb2.0の技術を利用して、研究者の出版の機会を高めようとする動きがある。しかしこれは従来の学術出版の性格を変えかねないもので、当然歓迎する意見と

反対する意見がある。発表の内容をどう検証するか、さらに発表された論文を学術出版として評価するか否かが大きな問題となる。また、どのように論文やそのデータを保存するかも考えなければならない。一方、デジタル化され保存されているデータの追跡は紙媒体に比べてはるかにたやすくなり、盗用や剽窃の防止にもなる。今後、この動きがデジタル時代の学術出版を変えていくことになるのか、注目されるところである。

5. 情報リテラシー

Webを媒体として提供される情報のためのリテラシーの重要性は、今までも論議され実践されてきた。しかし、Web2.0の時代に入り、よりWebに特化した情報リテラシーが求められるものとなった。これは、今までのWebの評価基準では対処しきれない部分がでてきているからである。例えば、集合知により集積された膨大な量と種類の情報をどのように判断し、利用するか、またソーシャル・ネットワークというWeb2.0の特徴をどのように理解し有効な手段として利用するかといった点である。

5.1 今までのWeb評価基準と新しい評価基準の必要性

先にも述べたようにWeb2.0の浸透とともに新しい基準も必要になってきていると筆者は考える。ここでは、今までのWeb評価基準を表記し、かつ筆者が実際に学生に指導する際に新たに付け加える注意点を例として述べたい。

まず、これまでのWebの評価基準であるが、例として以下にKapoun (1998) の提唱した基準を挙げたい⁹⁾。

1. Web資料の正確性、2. Web資料の責任表示、3.

Web資料の目的, 4. Web資料の作成日時や更新の頻度, 5. Web資料の範囲。

この評価基準は現在もWebを評価するにあたり基本となるものであるが、さらに筆者は以下の項目を付け足している。

1. URLのドメイン名から典拠の権威を判断する。英語のドメインと日本語, 他言語における形式の違い（教育機関を表すacとeduなど）にも注目する。
2. 本文の精度は高いか, 誤字や文法の誤りはないか。短時間のうちに更新, 配信される情報の中には文章の質の低いものが存在する。
3. 頻繁な更新が行われているかをチェックする。更新日が記載されているか, 最終更新日はいつか。更新された日と自分の求める情報に最適な日付との間に矛盾が生じないか。
4. 責任表示の有無を見る。トップページだけではなく, どのページにも責任表示があるか。あるいはページの母体となるページへのリンク先が記載されているか。例えば, 元のページから独立したページの中には, 一見, 誰によっていつ作成されたものなのかが不明なものが多い。
5. リンクの数を見る。リンク先が適正なものであるか, またリンク切れがないか。
6. 履歴やノートがあるか。
7. 統計データなどの資料があれば, そのデータの信用性を見る。典拠が記載されているか。Web上で得られるデータは一次情報でない場合が多い。
8. 脚注があるか。脚注に記載されている情報源の適切性と, 情報の信憑性を見る。Webに記載される脚注はWebの引用の典拠が多いが, リンクなどを確かめる。

たとえば, 学術情報を発信しているサイトであっても, 所属機関名, 著者名, 作成日や更新日のな

いサイトの評価は下がる。

また, 筆者がよく使用する例はwikiやblogについての検証である。文献資料として認められない風潮が一般である反面, 両方とも他の有効な情報源としての利点も持つため, 後述の項目が判断の材料になる。wikiに関しては, ソーシャル・ネットワークと共通して, 不特定多数の人々によって作成されるwikiと, ある特定の分野の人々によって作成される特化型のものとがある。前者のタイプのwikiにおいてよく挙げられる例がWikipediaで, 言うまでもなく集合知を利用して製作される大規模な百科事典である。紙媒体で出版される百科事典では収録不可能だった膨大な情報が提供され, 一般のインターネットのユーザーによる利用も高い。その一方で, 紙媒体の百科事典に比べて内容に対する信頼性への疑問も当然存在する。例えば, 英語版のWikipediaによる日本に関する事項などは, 以前は玉石混淆の感が否めなかった。最近では, 信憑性に欠ける内容に対しては, 典拠を求めるなどの警告がページのトップに現れるようになり, 信頼できる百科事典としての機能を高めようとする姿勢がうかがわれる。

後者のwikiの例は, 主題が狭義に絞られた, 特定のメンバーによるビジネスや会議録, リサーチにおいて利用されるものである。パスワード制により投稿も利用も限定され, 管理者の目が行き届いている。意見の交換も速やかにまた頻繁に行われ, 主題となるものの質の向上を目的として形成されるものが多い。

前者のwikiを参照する際の注意点としては,

1. 本文に誤字や文法の誤りがないか。
2. 脚注は正確か。
3. 「ノート」や「履歴」を見るのも判断の一つとなる。
4. ページに「警告」がないか。
5. どのような外部リンクを, いくつ持っているか,

リンク先は信頼性のある情報源となり得るか。正確性を判断する基準となる。

blogもまた今や重要な学術コミュニケーションの一部である。blogから得られる情報は価値が高く量も多いが、blogを運営している人の数も膨大である。blogに関しては、次の項目を念頭におくように注意している。

1. blogの歴史を見る。著者がどのくらいの期間同じ主題でblogを続けているか。過去の記事も参照する。
2. 著者のプロフィールを読む。本名を使っているか、所属先、教育・勤務の履歴が明確に表示されているかも一つの判断材料になる。
3. コメントが多数つけられている記事は、それだけ情報が集まっていることが多い。しかし、コメントを寄せている人物のプロフィールは明確でないことが多いので、注意する。
4. wikiと同様、リンクについて調べる。

5.2 Critical thinking

ここで、情報リテラシーによく使われるcritical thinkingについて少し言及したい。critical thinkingは、物事を判断・分析するための評価方法で、20世紀の初めに提唱された。最初にcritical thinkingという言葉を使ったのはフランシス・ベーコンとも言われる¹⁰⁾。基本的には、偏見や誤った情報に惑わされずに、物事を正しく評価、分析するための方法であるが、この評価方法を使用した情報リテラシーは米国では教育界を中心にかなり浸透しており、文学、科学、美術などあらゆる分野にわたって、早いところでは小学校の授業から取り入れられている。現在ではその一つとしてWebの評価がある。評価方法はさまざまであるが、Webに関連した方法を述べているよい例がカリフォルニア大学ロサンゼルス校の図書館のサイトである¹¹⁾。これは大ま

かに、Webの中身とその評価、ソースと日付、構造に分類し、さらに詳細な項目に分けて評価方法を述べたものである。Web2.0を評価する上での特性としてタグが付せられているかどうか、個人情報の保護はされているかなどの項目が挙げられている。

物事の考え方、取り組み方は個人によって違いがあるが、これは環境のみならず教育によっても大きく影響される。対象となる事物を批判的に見るというのではなく、客観的に観察し分析する習慣は、情報リテラシーの面で必要な能力を養うことになる。この習慣は早いうちから身に付けておくべきではないだろうか。

6. 結び

Web2.0は最近までのWebにおけるさまざまな試みが波にのって普及してきた折、それらを説明する概念として提唱された用語である。日本ではWeb2.0を超えてすでに次の動きに関心が移っているとする見解もみられると聞が、米国、特に筆者の存在する図書館界ではますますWeb2.0環境を利用した活動が増えてきており、この潮流は当然続くと思われる。日本においても、一見終わったと見られるこの現象は、明確に認識されないまでも形を変え、変化し発展していくのではないだろうか。

それに伴い、関連した新しい技術や現象は目まぐるしく登場してくる。また情報量はますます膨大になり、それに飲み込まれることなく上手に舵を取っていくためには、情報リテラシーがますます必須になるだろう。特に、経験年数の浅い図書館利用者にはインフラストラクチャーとインターネットの垣根を越えて自由に得られる情報との区別がつきにくい。また、Second Lifeなどの仮想世界と現実の世界を自由に出入りするようになると、

余計に誤情報に関する危機意識が薄まると予想される。情報リテラシーはcritical thinkingに見られるように、なるべく若いうちから身に付けることが望ましい。これは、単に情報を入手、判断する側のみでなく、情報を管理・運営する側にも必要な基

準であり、情報発信を計画する際に効果的な方法である。今、Web2.0によってもたらされた環境のもと、あらためて情報リテラシーの見直しを図り、効果的な運用をしていくことが望まれる。

参考文献

- 1) O'Reilly, Tim. "What is Web 2.0: Design patterns and business models for the next generation of software". O'Reilly Media. <http://www.oreillynet.com/pub/a/oreilly/tim/news/2005/09/30/what-is-Web-20.html>, (accessed 2008-11-12).
- 2) "Nielsen//Net ratings". Nielsen Online. http://www.nielsen-online.com/pr/pr_060511.pdf, (accessed 2008-11-12).
- 3) 工藤絵理子, 片岡真. 次世代OPACの可能性— その特徴と導入への課題—. 情報管理. 2008, vol.51, no.7, p.480-498.
- 4) Blyberg, John. "Library 2.0 Debased". Blyberg.net. <http://www.blyberg.net/2008/01/17/library-20-debased/>, (accessed 2008-11-12).
- 5) "Story Hour Garden on ALA Island". flickr. <http://www.flickr.com/photos/alastaff/2961080919/>, (accessed 2008-11-12).
- 6) Guess, Andy. "Cite Check". INSIDE HIGHER ED. <http://www.insidehighered.com/news/2008/07/08/citation>, (accessed 2008-11-12).
- 7) Maron, Nancy L.; Smith K. Kirby. Current models of digital scholarly communication: Results of an investigation conducted by Ithaka for the Association of Research Libraries. <http://www.arl.org/bm~doc/current-models-report.pdf>, (accessed 2008-11-12).
- 8) University publishing in a digital age. Social commentary on the Ithaka report. <http://scholarlypublishing.org/ithakareport/>, (accessed 2008-11-12).
- 9) Kapoun, Jim. Teaching undergrads WEB evaluation: A guide for library instruction. C&RL news. 1998, vol.59, no.7, <http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/acrl/publications/crlnews/backissues/1998/julyaugust6/teachingundergrads.cfm>, (accessed 2008-11-12).
- 10) Bacon, Francis. The Proficiency and Advancement of Learning. 1605.
- 11) "Thinking critically about Web 2.0 and beyond". UCLA Library Research help. http://www2.library.ucla.edu/libraries/college/11605_12008.cfm, (accessed 2008-11-12).

著者抄録

日本ではWeb2.0 への関心はすでに薄れていると聞かすが、むしろ新技術により創られたWeb2.0の環境はこれからも発展し続け、利用人口も増加し続けるという考え方にたち、Web2.0によってもたらされる情報リテラシーの見直しと実践について焦点をあてたい。まず、Web2.0の特性と情報リテラシーの関係を述べる。

次に、北米の図書館でのWeb2.0の考えや技術を使用した事例を挙げ、情報リテラシーの面からどのような点に注意すべきかを論じる。さらにcritical thinkingを紹介し、情報リテラシー教育の重要性を喚起する。

キーワード

Web2.0, Library2.0, ソーシャル・ネットワーキング, 情報リテラシー, クリティカル・シンキング

Author Abstract

Some information professionals in Japan argue that people already have lost interest in Web2.0, but I contend that the Web2.0 environment, developed by recent technology, will continue to evolve and that the number of Web2.0 users will increase. In this article, I focus on information literacy that needs to be discussed and implemented regarding the nature of Web2.0. First, I discuss relationships between the characteristics of Web2.0 and information literacy. Next, I introduce examples of Web2.0 in academic libraries in North America, and discuss the new aspects of information literacy. Finally, I introduce the concept of critical thinking to raise the importance of education regarding information literacy.

Key words

Web2.0, Library2.0, social networking, information literacy, critical thinking